

平成24年度国際教育推進委員会活動報告

国際教育推進委員会

工藤泰三・加藤衛弘・小林美智子・福原行也

石井克佳・建元喜寿・今野良祐・小澤真尚

筑波大学附属坂戸高等学校では、総合学科高校であることの強みを生かしながら国際教育・ESD のためにさまざまな取り組みを行ってきた。特に平成 24 年度は海外校からの参加者を招聘しての「高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸&つくば 2012」を開催するなど、その取り組みはまだまだ発展中である。本論ではこれまでの国際教育・ESD の取り組みを紹介するとともに、今後の展開について考察する。

キーワード：国際教育 ESD(持続発展教育) 教科「国際」 ユネスコスクール 教科間連携

1. 本校の国際教育・ESD の考え方

文部科学省(2005)によると、国際教育は「国際化した社会で、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要な態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義されている。筑波大学附属坂戸高等学校(以下「本校」)では、その国際教育の充実のために平成 20 年に校内に国際教育推進委員会(Committee of International Studies、以下「CIS」)を設置し、CIS が中心となりさまざまな国際教育活動を展開してきた。CIS の設置以来、本校の国際教育を展開する上で基本とすべき考え方(基本コンセプト)を次のように設定している。

①「3F」で終わらない、深みのある国際教育を：Fashion, Food, Festival をネタにして盛り上がるだけの「その場限りの交流会」にとどまらず、「知る」から「考える」へ、そして「行動する」へとつながる活動にした。

②本校の、あるいは総合学科の特長を活かした国際教育を：総合学科高校だからこそ持ちうる農業・工業・家庭・福祉・商業などのいわゆる専門教科の知見を活かし、各教科の教員が連携しながら多面的に進める活動を実践していきたい。

③一部の教員だけに関わるのではない、たくさんの先生方が関わる国際教育を：特定の教員のみが進めるのではなく、教科の枠を超えて、より多くの教員が主体的に関わる国際教育を展開していきたい。

ESD については本来であれば国際教育とは分けて考えるべきところではあるが、本校では「国際教育は ESD

における重要な要素(分野)のひとつ」と考え、現在のところ CIS が ESD の推進についても中心となって行っている。

ESD という用語については教員間でもまだまだ理解が不十分であるかもしれない。ESD は国際機関においては「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現代の世代のニーズを満たす開発」¹あるいは「人間を支える生態系が有する能力の範囲内で営みながら、人間の生活の質を向上させること」²のための教育と位置付けられており、それらにつながる教育活動はすべて ESD 活動と捉えることができる。すなわち、普段の普通教科や専門教科のそれぞれの授業を含め、学校で行われている教育活動のすべてが実は ESD 活動であると言うことができる。ただし、ESD の視点から各教育活動を捉えるときには、各活動がこれからの社会づくりにどのように生きてくるのか、あるいはそれぞれの活動がどのように関連しあっているのかについて教員・生徒の意識を高める必要があり、そのために各活動の関連性を整理していくことが重要である。そしてその役割も今後 CIS が担っていくこととなる。

¹ 国連ブルントラント委員会(1987)。国立教育政策研究所(2012)より引用。

² IUCN/UNEP/WWF(1991)。国立教育政策研究所(2012)より引用。

2. 平成 24 年度の具体的な活動内容

本項では、平成 24 年度に実際に本校で取り組んだ国際教育・ESD の活動を紹介していく。平成 23 年度以前の活動については工藤ほか（2012）を参照されたい。

2.1. 「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成 20 年度より実施しているこのプログラムは、3 年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費を援助するものであり、20 年度から 23 年度までの 4 年間で計 22 名の生徒がこのプログラムに応募し、うち 7 名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

24 年度においては 2 年次生を対象に募集した結果、7 名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

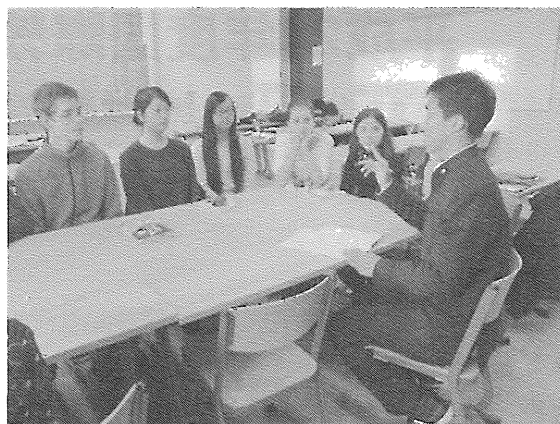
生徒	研究テーマ
A	養蜂を利用したインドネシアでの森林保全活動
B	自動車大国ドイツが掲げる「電気自動車世界トップ」という目標
C	われわれ日本人が学ぶべきフィリピン精神
D	日本のアニメ作品が海外に及ぼす経済効果
E	日本と世界の幼児教育
F	外国における語学教育
G	オニヒトデの大量発生

表 1 応募生徒の研究テーマ

書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考した結果、「海外への渡航が卒業研究の深化にどれだけ効果的か」などの観点から生徒 C・F の 2 名を支援対象とすることに決定したが、生徒 C は 1 月に渡航予定だったものの出発直前に体調不良となり、実際には生徒 F のみが 2 月にドイツに渡航し、現地の学校を数校訪問し調査活動を行った。なお、生徒 F の活動については平成 25 年 2 月に本校で開催された総合学科研究大会の分科会 C において生徒 F 本人が発表した。

2.2. トヨタ財団「アジア隣人プログラム」への参加

平成 22 年度から 24 年度にかけ、トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けて「インドネシアと日本の高校生の協働による、地域のゴミ問題の解決方法の提案と実践～学校が核となった地域コミュニティの創造と高校生が発信する 3 R 活動と ESD～」という主題で 2



ドイツの高校生と話し合う生徒 F

年間活動を行った。この活動では、計 3 回ずつの相互訪問およびインターネットを利用した交流を通し、本校生徒と姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校（インドネシア）の生徒が協働してそれぞれの国のゴミ問題について調査し、お互いに話し合いながら解決方法の提案を「Kira-kira 3R」という冊子にまとめた。また本校の文化祭ではプログラムに参加する生徒とコルニタ高の生徒が一緒にインドネシア・ショップを開き、活動内容を紹介しながらインドネシアの商品の販売を行い、本校生徒だけでなく校外からの来校者にもゴミ問題のことやインドネシアの魅力などについて知ってもらうことができた。



文化祭でのインドネシア・ショップ

2.3. ユネスコスクールとしての活動

本校では他の学校と協力しながら国際教育・ESD の取り組みを発展させるための土台作りとしてユネスコスクール（ASPnet）への加盟の手続きを進め、平成 23 年 1 月に正式に加盟が認められた。ユネスコスクールとは、「そのグローバルなネットワークを活用し、世界中の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、

地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指して」³いる世界的学校間ネットワークで、現在は本校教員が全国大会や研修会に参加して情報収集をしたり、生徒が「高校生の高校生による ESD 世界フォーラム」に準備委員として参加するなどの活動を行っているが、今後は国内外計 9,000 以上の学校を有するネットワークを生かし、海外校を含め他校と協力しながら、多面的な切り口で ESD に取り組んでいきたい。

2.4. 「高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸&つくば 2012」の開催

平成 24 年度の筑波大学附属学校改革事業の一環として、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、4 か国 5 校⁴の生徒・教員を招待し、本校の生徒・教員とともに持続発展可能な社会づくりに向けたシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは各校の生徒による環境問題の改善に向けたプレゼンテーションやディスカッションとともに、本校生徒による日本文化紹介、海外生徒による各国の文化紹介も行い、生徒同士の相互交流を深めることができた。また海外生徒は本校生徒の家庭に 3 泊 4 日のホームステイをし、校外でも異文化理解を深めた。



高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸での
プレゼンテーション・セッション

なお、このシンポジウムは筑波大学農林技術センターが主催する「国際農学 ESD シンポジウム 2012」（於：筑波大学つくばキャンパス）に時期をあわせて開催した。

³ ユネスコスクール公式ウェブサイト
(<http://www.unesco-school.jp/>) より引用。

⁴ 生徒・教員を招待したのは、前述のコルニタ高校（インドネシア）・新民高級中学（台湾）・ワタナー・ウィタヤー・アカデミー（タイ）・カセサート大学附属高校（タイ）・フィリピン大学附属高校（フィリピン）の 5 校。いずれもこれまで本校との交流経験があるか、あるいは附属している大学が筑波大学と教育連携協定を結んでいる。

これは本シンポジウムの参加生徒が大学のシンポジウムにも参加できるようにするため、生徒たちは実際に大学のシンポジウムのプログラムの一部としてプレゼンテーションやポスター発表を行い、国内・海外の専門家の人々とも意見交換を行うことができた。

2.5. 教科「国際」の各科目の開発・実践

本校では平成 23 年度入学生の教育課程より、学校設定教科「国際」を設置し、本校の国際教育の核を担うべく下記の 4 科目を設けている。24 年度には 2 年次科目の 2 つがスタートし、25 年度には 3 年次科目も合わせ 4 科目すべての実践が始まる。

- Discussion & Debate（2 年次選択）：日本語および英語を用い、世界の諸相について議論・討論するために必要な基礎能力を養う。
- 国際社会（2 年次選択）：日本（人・文化）について認識を深め、次に世界の各地域の人々・文化、日本とのつながりへの意識を高め、地球的課題に対し考察・行動するための素地を養う⁵。
- 比較文化論（3 年次選択）：世界の文化や宗教を広く扱い、文化・宗教の多様性に対応する素地を養う。
- Global Studies（3 年次選択）：南北問題・多文化共生・国際協力などについて見識を深めるとともに、国際的問題に主体的に関わる姿勢を身につける。

2.6. その他の国際教育活動

- アジア高校生による聞き書きプログラム：2 年次選択科目「環境調査」受講者がインドネシアに渡航し、本校生徒は日本で、コルニタ高校生徒はインドネシアで行った聞き書き（農業や林業、工芸などの名人職人の方にお話を伺い記録する活動）の合同報告会を行った。3 月にはコルニタ高校生徒が来日し、本校にて本校生徒と交流をした後、東京で開催された「第 11 回聞き書き甲子園フォーラム」⁶にて両校生徒が活動内容を発表した。
- 新しい校外学習の実施：2 年次生対象の海外への校外学習の渡航先を、従来の 160 名全員が 1 か所に行くという形から、25 年度にはオーストラリア・

⁵ 「国際社会」の詳細については本紀要 pp.79-96 を参照のこと。

⁶ 「聞き書き甲子園」については <http://www.foxfire-japan.com/> を参照のこと。

インドネシア・台湾の3か所に分かれて実施する。グループの規模を小さくして生徒一人一人の活動への関わりを深めながら海外の交流校との協働学習活動を実現することが狙いである。原則として生徒の希望を最優先することとしており、最終的には2年次生160名のうちオーストラリアには約100名、インドネシアには約10名、台湾には約50名が渡航する予定である。

- 留学生や海外からの訪問の受け入れ：24年度から25年度にかけてスイスの高校生を1名留学生として受け入れており、25年4月からは新たにドイツからの短期留学生を受け入れている。さらに姉妹校であるコルニタ高校にも本校への留学を希望する生徒が数名いるので、今後その準備を進めていく予定である。加えて、ユネスコ・アジア文化センターや日中友好会館などからの依頼に応じる形で、海外の生徒や教員、政府関係者等の訪問も随時積極的に受け入れている。
- 本校生徒の留学の推進：23年度から留学していた生徒2名（1名はアメリカ、もう1名はオランダ）が24年夏に帰国した。この2名には広報紙にコメントを書いてもらったり、前述の「国際社会」の授業においてゲストスピーカーとして話してもらうなど協力してもらっている。そして25年4月現在、2名がインドネシアに、1名がアメリカに、1名がニュージーランドに留学中である。留学希望者の増加に対応するため、教務部と共同で担任教員向けの留学対応ガイドブックも作成中である。

3. 課題と今後の展開

さまざまな活動を行う中で、さまざまな課題、あるいはまだ本校の活動に不足しているものも見えてきている。本項ではそれらについて考察してみたい。

課題としては昨年度と同様に、関わる生徒の数・教員の意識・生徒の変容の測定の3点が挙げられる。まず各活動に取り組む生徒の数であるが、今年度の国際教育の各活動にどれだけの生徒が関わったかを概算すると、重複はあるもののおおよそ表2の通りとなる。

25年度は前述の通り教科「国際」の3年次科目が開講されるが、その反面ESDシンポジウムなどの行事については予算の獲得など不透明な部分が残るため現在のところ実施を確定できていない。それらの行事に頼るばかりでなく、普段の教育活動においてより多くの生徒を巻き

込んでいくことが重要であろう。

活動項目	関わった生徒の数
国際的視野に立った卒業研究の支援プログラムに応募	7
アジア隣人プログラムにメンバーとして参加	約20
ESD世界フォーラムに委員として参加	2
高校生国際ESDシンポジウムに発表者またはサポートメンバーとして参加	18
高校生国際ESDシンポジウム参観	約50
教科「国際」の科目選択者	43
アジア聞き書きプログラム	5
オーストラリア校外学習	160

表2 平成24年度の国際教育活動に参加した生徒の数

教員の国際教育・ESDに対する意識についてはかなり向上が見られる。例えば今回の総合学科研究大会のテーマについての議論、教員対象の国内・海外研修の応募への反応、教科「国際」の各授業への関心などにおいて、以前より多くの教員が国際教育やESDに積極的・肯定的に捉えているという印象を受けるようになった。この流れを断ち切らず、さらに継続的に教員の意識向上に努めていきたい。

生徒の変容の測定についてはCIS発足以来の懸案であったが、24年度から筑波大学附属学校教育局プロジェクト研究4「子供の国際的資質を育てる実践」（座長：石隈利紀教授）において国際教育活動がもたらす生徒の変容を測定するための質問紙の開発を始め、開発のためのモデルとして本校で実施している海外校外学習の効果を検証中である。今後はその質問紙の開発を含め、校外学習のみならず、さまざまな国際教育活動が生徒たちにどのような変容をもたらしているのか検証を進めていきたい。

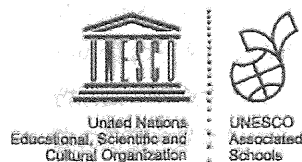
4. おわりに

CISが発足して5年が経過したが、これまでCIS委員のみならず多くの先生方に協力をいただきながら多様な活動を行ってきた。その成果が認められ、本校の国際教育活動に対し筑波大学より「平成24年度教育に係る学長表彰」を受けることができた。これまでの本校における活動の発展は、CIS委員はもちろん、本校の全教員や筑

筑波大学の先生方、国内外の各高校・大学・団体・組織の生徒・学生・先生方の協力があったことである。このことに感謝を申し上げるとともに、今後も多くの人々とのつながりを大事にしながら、より一層の国際教育・ESDの発展に尽力していきたい。

【参考・引用文献】

- 工藤泰三ほか（2012）．平成 23 年度国際教育推進委員会活動報告．「研究紀要」第 49 集 pp.53-60．筑波大学附属坂戸高等学校．
- 国立教育政策研究所（2012）．「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究（最終報告書）」はしがき．
- 筑波大学附属坂戸高等学校（編著）（2012）．「新時代の総合学科総合学科パイオニアに学ぶ基本理念と新たな可能性」 pp.92-105．学事出版．
- 文部科学省（2005）．初等中等教育における国際教育推進検討会報告．



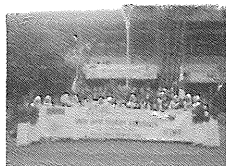
筑波大学附属坂戸高等学校

ユネスコスクール・ESD実践概要図

実践テーマ：総合学科の特色を生かした多角的アプローチによるESDの実践



筑波大学国際農学ESDシンポジウムにて発表



インドネシア・コルニタ高校と姉妹校締結



国際的視野に立った卒業研究支援プログラム



香港訪問生徒と交流授業

総合学科の特色を生かした、多面的な教育活動を実施
特定のトピックに対して多角的なアプローチから追究

多面的な理解に基づいた多角的なアプローチによる研究
国際的な舞台での調査、研究成果の発信・交流



地元スーパーでの校内産野菜の販売実習



工学情報基礎：ライトレースカー走行実験



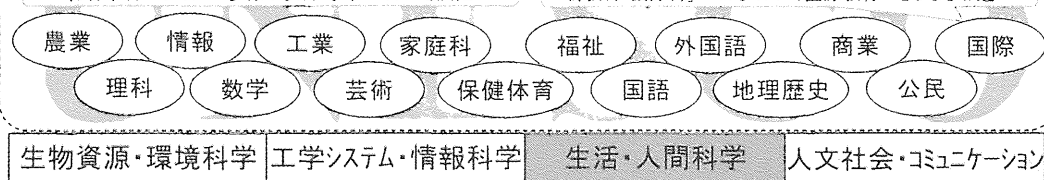
フードデザイン：世界の伝統料理に挑戦



生徒主催の保育園での手話講座

総合学科ならではの多様な教科・多彩な科目を設置

新教科「国際科」の立ち上げで国際教育のさらなる加速へ



2年次より専門科目の学習が始まるが、その立脚点として
4つの科目群のうちから1つ選び、学びの柱としていく



生物資源実習 野菜の収穫



文化祭での福祉作業所との共同販売



アパレル：オリジナルドレスの縫製作業



Advanced English：時事問題ディベート

自己理解、社会理解、職業理解、履修計画作成
社会を知り、どのように生きていくか、何を学んでいくか

総合学科での学びのカキチを学ぶ
どのように学び、その学びがどのように生かされていくか

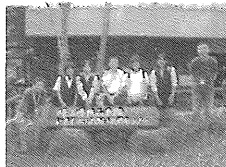
産業社会と人間

キャリア教育

キャリアデザイン



産社 果園づくり



産社 園地体験



産社 福祉入門(車イス体験)



1年次コミュニケーション・キャンプ

